

Monthly Report

Vol.71 / 2012 Mar.

東日本大震災から1年・・・



未曾有の大震災から1年が経った2012年3月11日(日)14時46分、昨年建立した慰霊碑の前に教職員が集結し、大震災の犠牲となった多くの方々に向けて黙祷を捧げました。その後、志半ばで津波の犠牲となった本学学生3名の名前が刻まれた慰霊碑に献花と焼香を行いご冥福をお祈りしました。

目次

東日本大震災から1年	1
平成23年度卒業式	2
退任される先生方による最終講義	3
グローバル・スポーツキャリアカンファレンス 2012	4
学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業	6
文科省にインターンシップ	7
学生表彰 学校支援ボランティア表彰	8
入学前交流セミナー	10

学生の活躍や、取り組みをご存知でしたら
広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関
にも旬な話題を提供していきたいと考えて
おります。

本誌へのご意見・ご質問等がございましたら、
広報室までご一報ください。

広報室

直通 0224-55-1802

内線 佐藤美保 256

土生佐多 200

伊東宏之 271

Email:kouhou@scn.ac.jp

平成23年度 仙台大学卒業式



3月17日（土）に第5体育館において仙台大学卒業式「第42回体育学部卒業証書・学位記授与式並びに第13回大学院学位記授与式」を挙行政、体育

学部510名（体育学科292名、健康福祉学科110名、運動栄養学科71名、スポーツ情報マスメディア学科35名、台東大学とのダブルディグリー制2名）と大学院13名が学び舎を巣立ちました。今年度はダブルディグリー制度で初めて本学の学位を取得した台東大学（台湾）の学生2名にも学位記が授与されました。

<総代>

体育学科	白井雅子
健康福祉学科	横山宗平
運動栄養学科	沢田章太
スポーツ情報マスメディア学科	遠藤美郷
ダブルディグリー制	劉 姿伶
大学院	藤田雅士

学長賞

西村光生	漕艇部	宗像 陸	体操競技部
遠藤 光		石原 大	
小笠原沙織		佐藤 亘	
庄司文哉		佐藤世弥	サッカー部
入野谷圭太		森田光弥	
吉良朋恵		奥基博亮	
小倉啓吾		引地敏生	
谷藤祐貴	平野洋輔		
松本紳司	B.L.S部	草刈大地	
細川沙智	柔道部		

スポーツ功労賞(個人)

小山真男	トライアスロン部
宮原尚子	
兼子貴江	柔道部
菊池舞美	

文化功労賞

吉田朝美	学友会
------	-----

日本介護福祉士養成施設協会会長賞

田村翔平	健康福祉学科
------	--------

全国栄養士養成施設協会会長賞

平 沙知	運動栄養学科
------	--------



避難訓練を実施

卒業式の前日3月16日には東日本大震災を想定した避難訓練を行い、万が一の事態に備えて避難経路や教職員の誘導方針の確認が行われました。

幸い、卒業式では地震もなく、滞りなく式は終了しましたが、今後も教職員が災害への危機管理意識を高く持ち、安全な大学運営を図っていく所存です。

退任される先生方による最終講義



勇教授の順にご登壇いただきました。

本学3回生でもある横川教授からは「Sprinting」と題して、仙台大学の思い出とともに走るという基礎運動が陸上競技以外のスポーツにも必要であることやこれまでの研究結果が紹介されました。



永年にわたって小・中学校教諭、中学校校長を務められ

た後、本学で10年間教鞭をとられた佐伯教授からは「10年ひと昔」と題して、道德教育の重要性と、教員を目指す学生に向けて仙台大学の諸先輩方が築いてこられた教育現場での信頼と実績に自信を持ち、良い教員になってほしいとのメッセージが送られました。

仙台大学開学2年目から永年にわたって本学で教鞭をとられた宍戸教授からは「脚下照顧」と題して仙台大学の開学当時の思い出を写真とともに振り返った後、脚下照顧という言葉を念頭に自分の足元をしっかりと見るように学生に指導してきたことが語られました。

会場には教職員・学生合わせて約150名が聴講し、講演後には先生方に学生代表者およびサークルの代表者から花束が贈呈されました。



平成23年度学生表彰



3月5日(月)にKMCH大会議室において平成23年度学生表彰が行われ、スポーツ競技において国際大会出場または全国ベスト8以上の功績をあげた学生に対してスポーツ功労賞が贈られました。

※写真提供：学生課

スポーツ功労賞(個人)

渡辺瑞基	B.L.S部	スケルトンアメリカズカップ第2戦 第5位
菊地貴志		スケルトンアメリカズカップ第1戦 第17位
米倉理絵		スケルトンアメリカズカップ第1戦 第4位
小林真衣		スケルトンアメリカズカップ第2戦 第10位
三上大輝		ボブスレーアメリカズカップ第4戦 第11位
山本収一	体操競技部	全日本学生体操競技選手権 跳馬第3位
松岡 真	漕艇部	世界ジュニア選手権 男子軽量級舵手なしクォドルブル第21位

スポーツ功労賞(団体)

漕艇部	全日本大学ボート選手権男子エイト第2位 他
新体操競技部	全日本学生新体操選手権団体総合5位 他
サッカー部	全日本大学サッカー選手権ベスト8 他
体操競技部	全日本学生体操競技選手権団体総合4位 他
アメリカンフットボール部	全日本大学アメリカンフットボール選手権ベスト4

「グローバル・スポーツキャリアカンファレンス 2012 in Sendai」を開催 ＝仙台大学スポーツキャリア大学院プログラム＝

仙台大学大学院は2012年3月19日、日本のトップコーチやトップアスリートの「デュアルキャリア」を考える「グローバル・スポーツキャリアカンファレンス 2012 in Sendai」をフォレスト仙台にて開催しました。

このカンファレンスは、文部科学省の委託事業「競技者・指導者等のスポーツキャリア形成支援事業における『スポーツキャリア大学院プログラム』」の一環として開催されたもので、日本のトップコーチやトップアスリートのパフォーマンス・パスウェイ（国際競技力向上を指向する継続的な営み）におけるデュアルキャリア（高いレベルでのスポーツと将来に備えるための高等教育の両方の追求）の在り方について、情報共有や意見交換が行われました。

欧州で主要政策課題となっている「デュアルキャリア」

第1部では、「デュアルキャリア」という考え方の発祥の地である欧州の動向や事例について、ロンドンに駐在して我が国のスポーツの推進に関わる情報収集や現地関係者とのコミュニケーションを行っている日本スポーツ振興センター（NAASH）国立スポーツ科学センターの中村宏美氏から、英国におけるデュアルキャリアに関する取り組みや、欧州連合（EU）におけるデュアルキャリア推進の背景について情報提供をいただきました。

英国では2003年にTASS（Talented Athlete Scholarship Scheme）という公的機関が設立され、2012年ロンドンオリンピックに向けて発掘・育成・強化されるアスリートが、ロンドン大会で活躍するだけでなく適切に将来への選択肢を持ちうるように、各競技団体や11の拠点大学等との連携を図りながら、エリートトレーニングと学生生活の両方をサポートしていることが紹介されました。またエリートアスリートのデュアルキャリアは欧州委員会

（EC）の主要政策課題の一つとなっていることも報告されました。



YOGを通して考える、次ステージへの「レディネス（準備）」

第2部では、「デュアルキャリア」を支援するスポーツキャリア大学院プログラムの具体的な形を検討する上での主要テーマである「グローバルに活躍する人材の次ステージへの『レディネス（準備）』」とは何かについて、海外調査報告とディスカッションを行いました。

2012年1月にオーストリアのインスブルックで開催された第1回ユースオリンピック冬季競技大会（YOG）を現地視察した松井陽子氏（日本オリンピック委員会）や岡田成弘先生（本学助教）から、14歳から18歳を対象とした国際総合競技大会の新たな取り組みである「文化・教育プログラム（CEP）」について報告。国際オリンピック委員会（IOC）がCEPのコンセプトやプログラムを通じて、オリンピックへの参加が期待される若いアスリートが将来、各国を代表するロールモデルとしてどのような素養や知識・能力を獲得してほしいと考えているか、またその狙いに対して、参加をしたアスリートたちがどのようにそれを受け止めたかなどの情報や課題が共有されました。その上で、粟木一博先生（本学教授）のコーディネートにより、そこから考える「レディネス（準備）」のあるべき姿とそれを満たすための大学院プログラムのあり方が検討され、今後に向けた一つの方向性が導きだされました。



競技をしながら学ぶことのはざまにある 「不安」と「挑戦」

第3部の「トップコーチ&アスリート談義」では、ここまで検討されたことを踏まえて、スポーツキャリア大学院プログラムの対象となるトップコーチやトップアスリートに参加をしていただき、自身のキャリア形成に関わる現状や置かれた状況や意識、これまでに関わる現状や置かれた状況や意識、これまでに取り組んできたこと、今後挑戦していこうと考えていること、そして本学スポーツキャリア大学院に期待することなどについて、フェンシングのオリンピックである池田めぐみさんのコーディネイトで自由に談義していただきました。

このセッションには、この春に本学大学院へ入学を予定しているスキーフリースタイル・エアリアル競技のトップアスリートである南隆徳さんも参加しており、2014年ソチ冬季オリンピックを目指しながら大学院へ進学しようと思った理由が語られました。「トップレベルで競技をしながら学ぶことは、きっと自分のパフォーマンスに良い影響を与えてくれるんじゃないかと思う」という言葉からは、不安ながらも新たな挑戦をしていこうとするアスリートとしての気概が感じられました。

本学はスポーツキャリア大学院プログラムの成果の一つとして学則に「長期履修学生制度」を新設。南選手は本制度を利用して4年間の計画でデュアルキャリアのプログラムを実践していく予定となっています。

なお、本セッションには、第2部で紹介され

たYOGに、IOCの被災地支援「TSUBASA」プロジェクトの一員として招待され、各国からの参加者とともに「文化・教育プログラム」を体験した宮城県の3名の中学生や、本学のタレント発掘・育成プロジェクトである「伊達なSPORT PROJECT」で発掘・育成されYOGに参加した柴田高校の3名もゲスト参加。YOGでの経験や今後の自身のキャリアについて、中高生の目線から思いの丈を述べてくれました。



いよいよ始動＝仙台大学スポーツキャリア大学院プログラム

仙台大学大学院は、このカンファレンスで新たに得られた知見や参加者の皆様からのご意見やご提案を踏まえ、来年度から本格的に始動するスポーツキャリア大学院プログラムが日本のトップコーチやトップアスリートの次のステージへの「レディネス（準備）」を支えるプログラムになるよう準備を進めていきます。

昨年度の活動報告は、仙台大学ウェブサイト <http://www.sendaidaigaku.jp/> からご覧いただけます。またカンファレンスの様子（写真）やレポートについては、スポーツキャリア大学院プログラムのfacebookページ <http://ow.ly/9VekT> でも順次公開していきますのでぜひアクセスしてください！

報告 阿部篤志講師

「グローバル・スポーツキャリアカンファレンス 2012 in Sendai」プログラム

Session 1 「パフォーマンス・パスウェイとデュアルキャリアの国際動向」

中村 宏美氏 独立行政法人日本スポーツ振興センター（NAASH）ロンドン事務所駐在
国立スポーツ科学センター（JISS）スポーツ情報研究部 研究員

Session 2 「グローバルに活躍する人材の次ステージへの『レディネス』とは」

松井 陽子氏 公益財団法人日本オリンピック委員会（JOC）拠点ネットワーク・
情報戦略事業 タレント発掘・育成支援 アシスタントディレクター
栗木 一博 仙台大学教授、スポーツキャリア大学院プログラム開発プロジェクトメンバー
岡田 成弘 仙台大学助教、同上

Session 3 「トップコーチ&アスリート談義」

東野 智弥氏 バスケットボール男子日本代表アシスタントコーチ
池田めぐみ氏 オリンピアン、財団法人山形県体育協会スポーツ技術員、JADAアスリート委員
南 隆徳氏 スキーフリースタイル・エアリアルナショナルチーム
「伊達なSPORT PROJECT」佐藤弾さん、野倉大貴さん、安藤早紀さん（柴田高校2年）
「TSUBASA」IOCサポートプロジェクト」佐藤奈々子さん（宮城教育大学付属中3年）
伊藤翠空さん（富谷町立富谷第二中2年）
藤井香乃さん（宮城学院中2年）

文部科学省委託事業平成23年度学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業(スポーツ・レクリエーション活動の支援)



現在、仙台大学は文部科学省委託事業平成23年度学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業(スポーツ・レクリエーション活動の支援)宮城県実行委員会(仙台大学、宮城県教育委員会、宮城県体育協会、宮城県レクリエーション協会)の中核団体として支援活動を行っています(委員長:丸山富雄教授・大学院研究科長)。

仙台大学を中心とした実行委員会では、「地域にスポーツ活動の企画・立案等に従事する人材を配置し、スポーツ・レクリエーションによる交流を通じて住民一人ひとりの心身の健康及び体力の保持増進に資する取組を支援するとともに、地域コミュニティの再生を図る」の趣旨の下、石巻市、富谷町、七ヶ浜町、多賀城市、名取市、気仙沼市、角田市、女川町、亘理町、山元町の総合型



地域スポーツクラブやスポーツ団体に対して、経費・人材・プログラム・ノウハウ等の支援を行っています。

今回事業の対象となっている地域では、津波被

害や仮設住宅の建設等で体育・スポーツ施設が十分ではなく、また地域から一步外に出た活動をしたいという要望もあり、現地に入っていく支援活動以外にも、仙台大学のキャンパスを活用した支援事業も行っています。

3月14日(水)には女川町、18日(日)には角田市、20日(火)には亘理町と気仙沼市から多くの地域住民の方を大学にお招きし、スポーツ・レクリエーション活動を行うなど心身ともにリフレッシュしていただきました。

参加した方々からは、「バスにのって久しぶりに外の景色を楽しむことができた」「専門的な指導をしていただいて良かった」「親子で行うレクリエーション活動が楽しかった」「施設が立派でびっくりした」等々の感想をいただきました。

この事業は、被災地支援として国の平成23年度第3次補正予算によって成立した事業であり、1月から3月の短期間で実施する事業となっています。なおこの事業は、平成24年度も継続して実施される予定です。



報告:馬場宏輝准教授
(スポーツマネジメント・コース主任、
宮城県実行委員会副委員長)

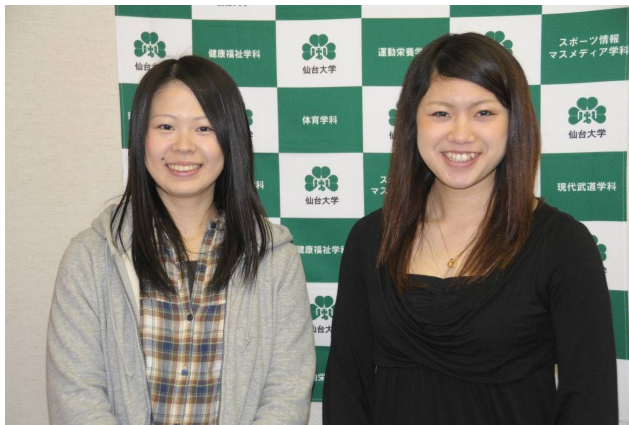
陸上自衛隊船岡駐屯地より感謝状



3月28日(水)、陸上自衛隊第二施設団長兼船岡駐屯地司令の秋山淳陸将補が学長室を訪れ、朴澤学長に感謝状と記念楯が贈呈されました。

今回の感謝状は自衛隊の使命に深い理解を示し、防衛基盤の育成への尽力と、駐屯地の各種行事に対し積極的な支援を行い充実発展に貢献したことと、東日本大震災に際して被災した隊員家族に避難場所を提供した行動に対して贈られたものです。

学生2名が文部科学省にインターンシップ



学生2名が文部科学省の平成23年度春期インターンシップ実習（2月13日～24日）に参加しました。文部科学省でのインターンシップ（就業体験）受入れは平成11年度からはじまり、平成14年度からは春期と夏期の年2度実施されていますが、本学学生が参加するのは初めてのことです。参加したのは、伊藤ありささん(スポーツ情報マスメディア学科3年)と猪狩薫さん(体育学科2年)です。国立スポーツ科学センターや味の素ナショナルトレーニングセンターなどスポーツの現場への就職を希望している伊藤さんはスポーツ・青少年局競技スポーツ課、日本体育協会への就職を希望している猪狩さんはスポーツ青少年局スポーツ・青少年企画課／体育参事官での職務体験を行いました。

2人はインターンシップ期間中、仙台大学東京事務所に宿泊しながら活動しました。東京事務所では学生が東京で就職の活動拠点としての、学生の学習スペースとしてパソコン数台も用意しています。セキュリティ等の関係で東京事務所への出入りは事前連絡が必要となりますが、都市部で

の活動拠点には最適な場所にありますので、教職員の皆様には学生への周知をお願い致します。

伊藤ありささん(スポーツ情報マスメディア学科3年／古川黎明高卒)

文部科学省のインターンシップに参加したのは、文部科学省の事業の一つであるタレント発掘事業に関わっていることもあり、文部科学省の仕事に興味を持っていたからです。特にスポーツ・青少年局競技スポーツ課は国際的な競技力向上に関わる部署で、オリンピックでのメダル獲得も大きな目的としています。そのような現場で学べたことは大きな経験となりました。このインターンシップを経て、自分は日本のスポーツの最前線で仕事がしたいのだと強く思うことができました。

猪狩 薫さん(体育学科2年／桜の聖母学院高卒)

スポーツ青少年局スポーツ・青少年企画課は会議の企画、会場の設置や準備、武道教育必修化等に伴う問い合わせも多く入っていました。インターンシップの仕事内容は毎日が新鮮で、子どもの体力低下が叫ばれる現在、こういうところが支えているのだと実感することができました。今回のインターンシップを通して、パソコンの知識の必要性を感じたとともに行政をもっと学びたいと思いました。今回、東京事務所を拠点に活動させていただきましたが、とても快適に過ごすことができました。東京で就職活動する他の学生も利用すべきだと思います。

学校支援ボランティア感謝状贈呈式

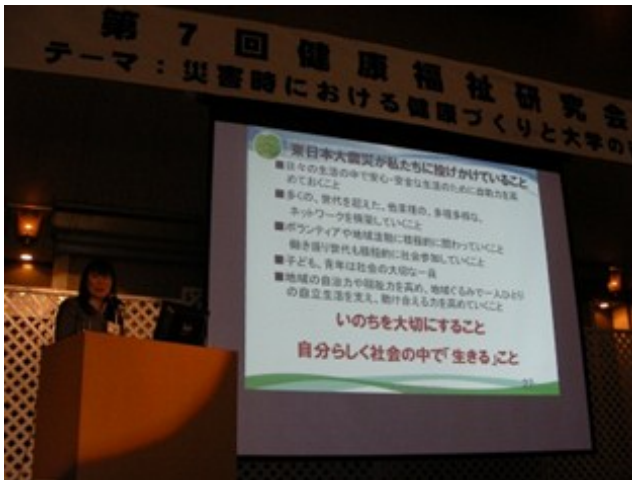


3月16日(金)に第5体育館大会議室において学校支援ボランティア感謝状贈呈式が行われ、小・中学校で学習支援や部活動支援を行った学生に対して教育委員会の担当者の方より感謝状が贈呈されました。今年度は仙台市教育委員会15名、岩沼市教育委員会24名、柴田町15名、そして今年度提携を結んだ大崎市教育委員会から6名の学生が感謝状を授与されました。

写真提供：学生支援室

第7回 健康福祉研究会

～災害時における健康づくりと大学の役割～



3月9日(金)に仙台ガーデンパレスにおいて第7回健康福祉研究会が開催されました。健康福祉研究会は健康福祉学科の学生、卒業生、教員および関連の方々の学習研さんの場として毎年開催されています。今回は昨年発生した東日本大震災を受けて、「災害時における健康づくりと大学の役割」をテーマに行われ、約200名が参加して理解を深めました。

研究会でははじめに仙台大学災害ボランティア活動の事務局の中心を担った山谷教授より、本学が行った災害ボランティア活動の取組みが紹介された後、介護福祉士養成課程を専攻している健康福祉学科の学生と、健康づくり運動サポーターの学生から詳細な活動報告がなされました。

その後、健康福祉学科4年生で七ヶ浜町社会福祉協議会の小野哲氏より、七ヶ浜町の被害状況や社会福祉協議会が行った災害ボランティアセンターでの活動内容等が紹介され、「被災者と住民との交流の場を作ることが大事」などとの話が発表されました。



小野哲氏

最後に特別講演として、美里町社会福祉協議会地域福祉係長の浅野恵美氏から、「地域の健康づくりと仙台大学の役割 災害ボランティアの視点もふまえて」のお話をいただきました。浅野氏は美里町が本学協力のもと開催している「みさと元気塾」を担当しているご縁から、避難所等についての相談が橋本教授に寄せられことから本学が美里町や女川町でエコノミークラス症候群予防体操指導に携わることになった経緯があります。講演では、東日本大震災を教訓に、世代を超えた他業種、多種多様なネットワークづくりを構築していくことの大切さや、地域の自治力や福祉力を高め、地域ぐるみで一人ひとりの自立生活を支え、助け合える力を高めていくことの必要性を強調されました。

健康づくり運動サポーター認定証書授与式



3月16日(金)にC201教室において健康づくり運動サポーター認定証書授与式が執り行われ、取得者一人ひとりに朴澤学長から認定証書が授与されました。今回認定されたのはベーシックコース10名とアドバンスコース2名、上級コース3名の合計15名で、健康福祉学科だけでなく他学科の学生も大勢取得しました。健康づくり運動サポーターは4月から東日本大震災で被災した亘理町、美里町、女川町の避難所を回り、エコノミークラス症候群予防体操指導を行い、避難所が解散後は同町の仮設住宅での活動を毎週続けています。今後もこの活動の中心として活躍することが期待されます。

エコノミークラス症候群予防体操指導に参加した学生に地域健康づくり支援センターより災害ボランティア表彰



3月16日（金）に災害ボランティアとして避難所や仮設住宅でエコノミークラス症候群予防体操

指導を行った学生に対して地域健康づくり支援センターより感謝状が贈られました。地域健康づくり支援センターでは東日本大震災後に亙理町、女川町、美里町の各避難所でエコノミークラス症候群予防のために教職員と学生を派遣してきました。避難所閉鎖した現在も仮設住宅での活動を継続しており、この活動は仮設住宅が閉鎖されるまで行う予定です。

今回の表彰は、授業や就職活動の合間をぬって活動した学生に感謝を表したものです。なお、多くの学生が積極的に活動に参加し、中には100回を超えて活動しました。

海外研修(デンマーク)に学生2名が参加



2月7-20日の日程でデンマーク研修が実施され、四釜千尋さんと三浦多輝美さん（共に健康福祉学科2年）が参加しました。現地では高橋まゆみ准教授と親交が深く、本学でもご講演いただいたこともある日欧文化交流学院(ノーフュンホルケホイスコーレ)の千葉忠夫理事長にご尽力いただき、日欧文化交流学院に4日間、バーノップホルケホイスコーレに10日間滞在し、他の留学生とともに寮生活を行いました。この間、リハビリセンターや作業所、市庁舎、ロースンゴースン小学校などの見学も行い、福祉先進国の素晴らしい社会に感動を覚えたようです。

四釜千尋さん（健福2年／村田高卒）

高校でも介護福祉の勉強をしてきたので、ノーマライゼーションを提唱しているバンク・ミ・ケルセンに関心があり、デンマークは行ってみたい地でした。デンマークでは介護する側もされる側も一人ひとりが楽しんで自分ができることを探して一生懸命活動しており、笑顔が溢れていたのが印象的でした。私も障害者のボランティアを行っています、見習うべき点がいくつもありました。

また、デンマークでは寝たきり老人がほとんど

いません。これは、デンマークの病院では手術後に在宅リハビリが基本で、入院期間は最長でも6日しか取りません。手術の翌日にはリハビリをはじめると筋力低下もせず、障害者の関節が固まったりしない。これは介護する側にとっても負担が少ないことにつながり、理想的だと思いました。

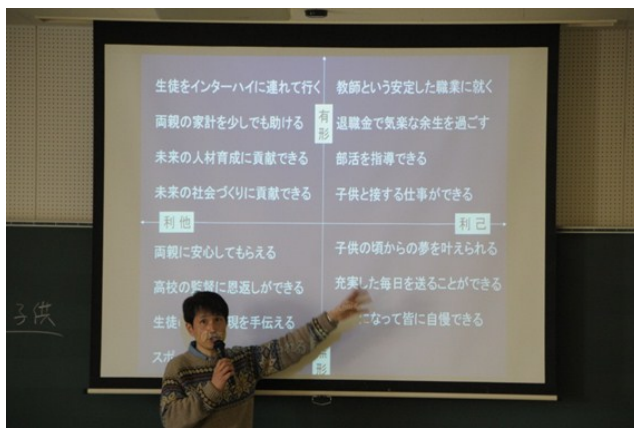
卒業後は特別支援学校教諭を志望していますが、障害者の楽しい生活を支援できるように支える。10人いれば10通りの幸せがあるので、各々が考える楽しい生活を伝えてもらい、それを実現できるようにサポートしていきたいと感じました。

三浦多輝美さん（健福2年／宮城広瀬高卒）

高校の時にアメリカに2週間滞在したことがあるのですが、語学力不足で現地の方とコミュニケーションが取れなかった経験から再度、英語圏に行きたいと思っていました。また、卒業後は養護教諭を志望しているので、養護の基礎である介護の先進国であり、「幸せな国」と呼ばれるデンマークの教育や社会を肌で感じたいと思い、今回の研修に参加しました。

今回の海外研修で印象的だったのは、デンマークの教育は1つの答えを導くのではなく、様々な考え方を創造させる教育だと感じました。日本では1+1=2という答えだけですが、デンマークでは他にも答えがあるのではないかと創造させるという教育をしているように感じました。私は子供たちの色々な考え方を尊重した養護教諭になりたいと思うことができました。

新入生対象“入学前交流セミナー”初開催



3月29日（木）に平成24年度スポーツ情報マスメディア学科、現代武道学科の入学予定者を対象にした「入学前交流セミナー」がE棟3階の3教室を使って開催されました。このセミナーは新入生が有意義な学生生活を送るために必要な知識や心構えを学ぶことと、新しい友人との交流を深めることを主目的として初めて開催されたものです。

参加は任意でしたが、7割を超える53名の参加がありました。セミナーは3部で構成され、セミナー①では入試創職部の中房部長が講師を務め、新入生同士が打ち解けるためのコミュニケーションゲームが行われた後、大学生に求められる心構えなどについて説明がなされました。その後、昼食をはさんでスポーツ情報マスメディア学科と現代武道学科で教室を分け、学科毎の趣向を凝らしたセミナーが行われました。

セミナーは9時30分～16時までと長時間でしたが、この一日で新入生同士がだいぶ打ち解けた様子でした。4年間の学生生活を充実したものにするための貴重なセミナーとなったことでしょう。



消防訓練を実施



3月30日（金）柴田消防署の協力の下、消防訓練を実施しました。今回の訓練は学生食堂から火の手が上がったという想定で実施され、実際に119番への通報も行いました。

本番さながらに火災消火班や避難誘導班、情報連絡班がそれぞれの持ち場である火元や守衛室に駆けつけ、その他の教職員は噴水前に避難しまし

た。全員避難後、柴田消防署員より消火器と消火設備取扱いの説明があり、火災消火班が実際に放水を体験しました。

最後に消防署員の方より通報する際の注意点や放火されない環境づくりの徹底のアドバイスがありました。

一番は火災を起こさないことですが、万が一起きた場合の初期消火の徹底と迅速な避難誘導等が求められます。



写真の消防官署員は本学OBの田中大登さん
（平成21年度運動栄養学科卒）

海外研修報告

報告者；内丸仁（体育学科・講師） Jin Uchimar, Ph. D. , Visiting Scholar

研修機関；コロラド大学・高地研究センター

Altitude Research Center Department of Emergency Medicine

University of Colorado School of Medicine

研修期間；2011年9月～2013年3月



低圧チャンパー内で

コロラドに来てからあっという間に7ヶ月が過ぎました。はじめは、研修先の研究所の進め方など慣れないことが多く、戸惑いもありましたが、スタッフのサポートもあり、すぐに研修に集中することができました。しかし、それ以上に大変だったのがコロラドでの生活環境を準備することでした。どんな手続きをするにも身分証明書（こちらではソーシャルセキュリティナンバー

（SSN）かアメリカでの運転免許証）の提示を求められます。この身分証明書がないと手続きができないこともあり、当然のことながら、コロラドに来た当初はこれらの身分証明書はなく、SSNの発行には少なくとも1ヶ月はかかるために（私は3ヶ月かかりました）、色々な手続きに困難を要し、およそ3ヶ月も生活環境を整えるのに時間がかかりました。

さて、研修の近況ですが、現在、4月から8月までの期間に実施する研究プロジェクトがスタートするところで、その実験方法の確認や準備等に取り組んでいるところです。このプロジェクトは、研究所内の施設で実施するのではなく、実験場所を平地のオレゴン州と高地のボリビア（南米）に移して実験を行います。したがって、研究者、測定機材や被験者がそれぞれの現地に移動し、実験場所をセッティングして研究を行います。研究所の研究スタッフは、実験そのものについての準備を行うのは当然のことですが、他に、リサーチマネージャーが中心となり荷物の梱包や輸送、現地までの交通、現地での宿泊や食事の手配、保険

加入、予防接種の準備などをしております。ただし、担当者だけが理解して準備しているだけではなく、スタッフ全員でそれぞれの準備状況を確認・把握しながら進めているところです。

実験準備をする中で感じていることなのですが、我々が使用する実験機材は年々発展しており、その機能性は多岐にわたっています。しかしながら、今回の研修で改めて考えさせられることは、昔ながらのオーソドックスな測定機材や手法がいかに優れているかということを実感しています。つまりは、誰でも簡単に使用することが出来、機材にトラブルがあったとしても問題を解決できること、そして、測定の精度も非常に高いということです。勿論、近年の高性能の機器も非常に魅力的なのですが、今回のプロジェクト研究は、研究の場所を移動しての研究となるために、これらのことをより強く実感しております。

また、ここコロラドも徐々に春らしくなり、多くの人がスポーツをする姿が見られるようになってきました。アメリカのプロスポーツは、野球、バスケットボール、フットボール、サッカー、アイスホッケーがありますが、ここコロラドはすべての種目のプロチームがあり、スポーツに関することには事欠かないところです。スポーツを通して、実際にスポーツをプレーして楽しむだけではなく、見て楽しむということも身近で感じることができ、あらためて、スポーツの力を実感しております。

体育大学の教員として、自身の視野を広げていくためにも、様々な視点からのスポーツを知り、研究、教育、地域社会への活動の場で活かせるようにしたいと考えております。



予備実験風景（中央は研究所のリーダー）



研究所スタッフ

フィンランド・カヤーニ応用科学大学から3名の短期留学生在が来訪

3月15日ー4月5日の日程で、フィンランドのカヤーニ応用科学大学からの留学生3名が本学を訪れています。同大学と本学は平成18年に国際交流協定を結び、以後毎年、互いの学生を短期交換留学生として受け入れています。滞在中は英語での講義やサークル活動に参加するほか、学生同士の交流や日本文化体験、柴田町内の小中学校訪問、被災地見学等のプログラムが実施されています。



全国に広がるコ・アクトの活動



障害者スポーツサポート研究部Co-Act.(以下：コ・アクト)は、自動車総連と(財)国際障害者年記念ナイスハートふれあい基金が主催するからの依頼により全国各地で開催される「ナイスハートふれあいスポーツ広場」の講師を務めています。平成23年度は神奈川、大阪、茨城県など7府県で活動し、今月7日に沖縄県で行われたイベントにも部員5名が参加しました。提供するの部員が考案したニュースポーツで、キンボールを使った「キンボールリレー」やフライングディスクを使った「巨大オセロ」などのオリジナルゲームで会場を盛り上げました。イベントに参加する毎に次のイベントにつながる反省点が出ているようで、沖縄のイベントでは予想を上回る700名を

超す動員があったそうで、参加者を整列させるだけでも苦労したそうで、限られた時間でどうするのが効率的なのかをイベント終了後に時間をかけて考えたそうです。「ナイスハートふれあいスポーツ広場」の活動を通して学ぶことは多く、コ・アクトの日ごろの活動に生かしているそうです。

「ナイスハートふれあいスポーツ広場」の活動は平成24年度増えることが見込まれており、5月、6月の2か月だけでも既に4件の派遣が決まっています。横山宗平さん(健康福祉4年)は「コ・アクトの活動が全国に広がっているのは嬉しいことですが、支給される金額によって派遣人数も限られてしまいます。後輩たちには部員全員が経験を積めるように工夫して活動してもらいたい。」と話しています。



< 沖縄県での活動に参加した学生 >
 横山宗平さん (健康福祉学科4年)
 志賀亜梨沙さん (健康福祉学科3年)
 高橋 舞さん (健康福祉学科3年)
 神田晃伸さん (健康福祉学科3年)
 朝井寛輝さん (運動栄養学科3年)

柔道部の鈴木真佑さんが体重別国内最高峰の大会に出場

柔道部の鈴木真佑さん(体育学科1年/京都文教高卒)が5月12、13日に福岡国際センターで開催される「平成24年全日本選抜体重別選手権大会」女子52kg級に出場することが決まりました。この大会は体重別の国内最高峰にあり各階級の選抜された8名



で杯を競います。今年に限ってはロンドンオリンピック出場者を決める最終選考もかかる大会です。本学在学中にこの大会に出場するのは、3年生で出場した田中美衣選手(了徳寺学園職員)に次ぐ2人目の快挙です。

鈴木さんは田中美衣選手と学校は違いますが滋賀県出身で京都府の高校を卒業して本学に進学したという共通点があり、高校まで全国の舞台で主だった成績を残せていないという点でも似ています。しかし、南條和恵女子監督も「鈴木は伸び代があるので田中選手と同じぐらい成長する可能性を秘めた選手」と期待を寄せています。

この大会の63kg級にはロンドンオリンピック出場を目指す田中選手も出場しますので、是非ご注目ください。

写真提供：南條和恵監督

仲田直樹助教が2年連続で全日本選手権に出場

4月29日に体重無差別で日本一を決する「平成24年全日本選手権大会」が日本武道館で開催され、仲田助教が東北地区代表として2年連続で出場します。この大会は日本で最も歴史ある大会で、この大会に出場することは、たいへん名誉あることです。

4月15日には「第27回皇后盃全日本女子選手権大会(会場：横浜文化体育館)」もあり、こちらには菊池舞美さん(体育学科4年)と渡邊悠季さん(体育学科3年)が出場します。あわせて、ご注目ください。

仲田助教

今年も名誉あるこの大会へ参加できることを光栄に思います。今年、東北予選の2週間前に怪我をしてしまい、その時は腕も上がらない状態でした。そして、実戦の乱取練習を十分にこなせないま



ま試合を迎えたため多少の不安はありました。しかし、今の代表選手は強行スケジュールで試合をこなし、怪我も十分に治せないまま我慢強く戦っていることを考えればこの程度で根を上げるわけにはいきませんでした。

本大会は、日本武道館に一試合場しか設営されないため会場全体が自分の柔道を見てくれます。自分にはないものは出てきませんが、持っているものは全て畳においてきたいと思います。仙台大学の学生にもいいところを見せたいと思います。



左：菊池舞美さん

右：渡邊悠季さん

細川優樹さん Vプレミアリーグでの活躍を誓う



細川優樹さん(平成23年3月体育学科卒)が3月14日(水)に広報室に立ち寄り、仙台大学のために色紙にサインを書いてくれました。この4年間で多くの教職員の方々に支えていただいたおかげで卒業を迎えることができ、目標であったVプレミアリーグのチームに入団することができたことへの感謝の念を話していました。

既に12月から開幕したVプレミアリーグでは内定選手としてチームの主力としてスタメンで出場しており、既にチームの戦力として活躍しています。チームはプレミアリーグ全8チームで最下位でしたが国内トップ選手との対戦を肌で経験できたようです。

「12月からスタメンで出させてもらい、チーム

の代表として試合に出場できる嬉しさを実感すると同時に、責任を強く感じています。チームのためにセッターとのコンビネーションを合わせ、私の持ち味であるスパイクの精度を上げていきたいです。また、レセプションのレベルを上げて、攻守のできる選手になりたいです。3月31日、4月1日に行われるリーグ入れ替え戦「チャレンジマッチ」で、つくばユナイテッド Sun GAIAとプレミアリーグ残留を掛けて対戦します。残留を決め、バレーボールのビッグタイトルである天皇杯、黒鷲旗で頑張りたいです」と話してくれました。

細川さんに大きく羽ばたいてもらいたいと願うばかりです。なお、サイン色紙は広報室の他、KMCH、運動栄養学科新助手研究室にも飾られています。

